

関西学院大学教授 細川正義

第22回

いのちのかけがえのなさ与人間の絆を描く 宮本輝
——『泥の河』の〈お化け鯉〉が伝えるもの——

宮本輝が文壇で注目されるようになったのは一九七七（昭和五二）年に『泥の河』で第一三回大宰治賞を受賞し、一九七八（昭和五三）年『蜚川』で第七八回芥川賞を受賞したことによる。三年後の一九八一（昭和五六）年に『道頓堀川』を発表し、初期のこの三作品を「川三部作」として評価されている。宮本輝は一九四七（昭和二二）年三月、兵庫県神戸市に生まれているが、父親四八歳のときの子供で、彼はかなりかわいがられて育ったようで、『泥の河』をはじめとして父のことを見つけて書いた小説が多い。父は戦争から復員して、自動車の部品を扱う事業をしていたが、一九五六（昭和三一）年には事業が失敗し家族で一時期富山市に移っている。富山での生活は一年あまりであったが、尼崎市に移ってから父の苦勞は続き、一九六九（昭和四四）年輝が二二歳のとき父は莫大な借金を残して亡くなった。輝はかなり苦学しながら大学を卒業している。また、両親の仲もよくなかったようで、貧困、寂しき、不安の中で思春期から大学生時代を過ごしてきたので、彼の小説には父と子の問題、貧困、父不在の不安と寂寥の中で生と向き合う登場人物たちに焦点を置いて描かれているものが多い。輝はそうした時代を振り返って小説家としての自分のテーマを述べた『二十歳の火影』『宿命という名の物語』において「私は、なぜ人間は生まれながらに差がついているのかという命題に、深くかかわっていいこうと思う」と述べている。また、『宮本輝全集』第一巻のあとがきで

川三部作を書き終えたとき、私は父のことを思い、さまざまな場所を巡らせ、さまざまな人間を見せてくれた父に、深く頭を垂れまし

た。父母となり其の子となるも必ず宿習なり、という日蓮の言葉
を、心の中で何度つぶやいたか知れません。

のようなもの、そうしたものに翻弄されながら、しかし苦学して大学を卒業し、懸命に生きてきた自己を重ねて、人間に定められた生を見詰め、そこに命の希望を問いつけているのが宮本文芸の世界であるという事ができよう。その宮本文芸の方向を定めることになったのが最初の本格小説『泥の河』である。この作品は冒頭に、

堂島川と土佐堀川がひとつになり、安治川と名を変えて大阪湾の一角に注ぎ込んでいく。その川と川がまじわるところに三つの橋が架かっていた。昭和橋と端建蔵橋、それに船津橋である。

と書かれているように、現在の大阪市北区中之島の西の「大阪市中央卸売市場」があるあたりを舞台にした一九五五（昭和三〇）年頃の話として描かれている。

当時は次第に自動車が増えてきているが、まだ馬車を曳いて荷物を運ぶのを仕事にしている人も混在しているような、まさに日本が「戦後」のときから「成長期」へむかつて転換しようとしている頃だった。

主人公信雄は八歳、宮本輝が中之島に住み曾根崎小学校に入学したのが一九五三（昭和二八）年で、昭和三〇年は主人公と同じ八歳、そして翌昭和三一年には富山市に引っ越している。安藤始氏が『宿命と永遠——宮本輝の物語——（おうふう）』の中で

『泥の河』は、信雄の人々との出逢いと別離、そしてこの土地すな

わち風景からの別れを、自分ではどうしようもないもの、つまり少年の茫漠とした致し方ない気持でもって描いた作品である。(略)

これは作者の幼年期の気持そのものであったようである。

と書いている通り、作者の体験した少年時代の心情が強く反映された作品だと言える。

昭和三〇年のころの日本は、戦争の傷跡と、そこから復興し成長期へ向かう時期との丁度転換期で、うまくいく人と、なかなか戦争の傷跡から抜け出せないで取り残されていく人が混在していた時期だった。例えば作品冒頭で、信雄にかき氷を半分くれた馬車引きの男が、店を出て馬車を動かしたとき「鉄屑を満載した」馬車の荷物が重すぎたために、船津橋の坂を登れずに、突然後戻りして、後ろから押していたこの男を下敷きにしてしまい、あっけなく死んでしまう場面がある。信雄の父晋平は、「ほんまにあっちゅうまに死んでまうんやでエ」「なあ、のぶちゃん。一所懸命生きて来て、人間死ぬいたら、ほんまにすかみたいな死に方するもんや」と信雄に語るように彼もまたまた戦争の傷を引きずっている状態の中にいる。

一方、近くの川に浮かべた舟で生活する一家が描かれるが、その家の少年喜一と信雄が友達になる。喜一の住む舟は、「廓舟」と書かれているように、母が、男の人の客を取って細々と生活している家族だが、この家族も、戦後の復興期から取り残されている。それゆえに、晋平の一家とは心情的に通じるところがあつて、他の人が疎んじているこの舟の姉弟を家と呼んだりして、親しく交わる。ただし、晋平が「すか」みたいに死んでゆく人生に挑みかかろうと決意し、「二瓶浩明『宮本輝宿命のカタルシス』EDI学術選書」して新潟へ引越そうとするのに対して、喜一の母は「夫を喪くした後」「いつのまにやら、体動かして働くのんが、しんどうなつてしもた」と無力感の中で生きていく状態が続いており、二つの家族は両極の姿として描かれている。

この二つの典型家族を通して、作品はいくつかのメッセージを示していると考えられる。

一つは、安藤氏が述べている「それは晋平が言うように、『しゃあない』ものであり、『どうしてやることもでけん』ことであつた。すべてはそうなるべくしてなつたところの宿命であるというのである」という、「どうしてやることもでけん」それが背負わされた(人間の宿命)というものを描いている視点である。新潟で再チャレンジする晋平を父に持つ信夫と取り残されたままの喜一の家族、宮本輝はこの人間の宿命を凝視しながら、もう一つのメッセージを描いている。それが作品の中の「お化け鯉」の存在である。

「お化けや。きつちゃん、お化け鯉や！」

信雄は必死に叫んだ。ズック靴が熔けたアスファルトにめり込んで、信雄は何度も転びそうになつた。

「お化けや、お化けがうしろにいてるでエ」

どんなに信雄が叫んでも、喜一は顔を出さなかつた。どんな思いで、舟の中でこの声を聞いていたかを想像すると、胸を締め付けられる終わり方である。そのお化け鯉は、出会つた頃、喜一が「誰にも言うたらあかん」と念を押して教えた二人の秘密で、二人だけの友情の印としてある。かたくなに顔を出さなかつた喜一は、子供ながらに宿命と向き合い、友との決別を懸命に覚悟しようとする姿の象徴という事ができる。

そして、もう一つは、作中

実際、鯉は信雄の身の丈ほどもあつた。鱗の一枚一枚が淡い紅色の線でふちどられ、丸く太つた体の底から、何やら妖しい光を放っているようだった。

とあるように、「妖しい光を放つ」お化け鯉は、安治川の底に沈む、様々なものの「死」から再生に向けての「いのちの輝き」の象徴としても描かれているといえよう。人が安閑として生きるのではなく、私たちが避けて通れない死を実感し、その死の対極としてある生を認識し受け止めることで、よりリアリティをもつて生きることができ、宮本輝のこの生に対する願いを深くとどめた本作品を、若い柔軟な心を持った高校生たちにぜひ薦めたい。